

◆水穂（瑞穂）国  水神族が火神の王を担ぐ国  水火の国

天（厳）は、天之国が厳之国を抱き込んだ国、つまり日の神を祀って鉄器づくり精通する太伯子孫が呉や楚の火神・水神族を取り込んだ国だ。一方、厳之国は炎帝（神農）の教えを守って青銅器づくり・弓矢の術に長ける楚の火神族が、越や楚のオロチ族・長江流域のワニ族ら水神族と一体になった国だった。かつての厳之国王朝が衣替えして天之国に取り込まれたのである。

これら天（厳）を支える家長の中には、自身の名に天の字を冠して天照神と名のる者もいた。時には、天（水）や厳（水）が海とも海部とも語って海の民だと強調してきた。

厳之国でも、火神を称える厳（火）が火と穂の字を独占して、青銅器づくりの魁、水田稲作の立役者、神代以来のオロチ族・ワニ族の統率者として振舞ってきた。その国のかたちは、水神が火神を担ぐ国、つまり水火（水穂、瑞穂）国の意であり、国の目指すところも「水田稲作に勤しむ国」だった。

